〈連 載〉

「積ん読」の本棚から【3】

異文化理解に大切なこと

―――『ダーリンは外国人 2』『最新ニュース英語辞典』

山本良一

現代は国際化社会と言われる。internationalization は20文字もあるなが〜い語だが，ほとんどの学習辞典に載っている。globalization もかなりの掲載率だ。本，雑誌，テレビには，外国や外国人（non-Japanese）の情報があふれるほどある。

でも，本当に国際化社会の一員として現代を生きていこうとするなら，われわれはもっと non-Japanese のことを理解したり，逆にわれわれのことを理解してもらったりする努力をする必要があるのではないか。

◎『ダーリンは外国人 2』（小栗左多里著，メディアファクトリー，2004. 3）

タイトルからもわかるとおり，『ダーリンは外国人』（2002.12）に続く第２弾である。この本には，じかに non-Japanese と接触して初めてわかることが満載であり，とにかくおもしろい。本屋の人気本コーナーでよく見かけるのも当然である。第１弾はカラーページが10ページちょっとだったのが，本書では60ページ超にも増えている。売れてる証拠だ！

この本，実は漫画である。トニーというアメリカ人の夫と一緒に日本で暮らす筆者のさおりが，ふたりのちょっとした違いなどをいきいきと描いている。

トニーは語学オタクである。日本語にもうるさい。旧字にも詳しく，「廳」などという字もご存知だ。観察も鋭い。「大岡越前」の「お」は３つあるが実際には2.2くらいしか発音されてないと言う。そういえば，横浜に「上大岡」という所があるが，京浜急行の車掌さんは２拍分しか「お」を言ってないかも知れない……。

値切るのもトニーの得意技である。元値が１台15,000円以上する携帯電話を２台とケーブルの３点を合計14,400円で買ってしまう。そんな様子をどきどきしながら見守るさおり。交渉することの少ない日本人である私にはさおりの気持ちがよくわかる。

ホームパーティーの苦手なさおり。たしかに知らない人がたくさんいる中で会話を交わすのは疲れる。そんなさおりに対するトニーのアドバイス。出身地や言葉，出される料理，趣味などを話題にすることで「その場を楽しむこと」，そして「会話が広がっていくこと」が大事だ。トニー自身，日本語があまりできなかった頃は，受付や焼き肉係などを引き受け，話をするチャンスを作ったそうだ。「話す文化」への順応術といったところか。また，ルポ（本書で大きな章立てのこと）の最後にある「トニーのつぶやき」欄では，「知ったかぶりをしない」という tips を教えてくれている。

そんなふたりがよくわかり合えることもある。たとえばクリスマスの意味。ふたりとも日本のクリスマスに疑問を感じている。トニーはクリスマスを恋人と過ごすことに違和感を覚える。クリスマスと恋人は無関係。たとえば「お盆を恋人と過ごす」ことが定着したら不思議でしょう，と語る。おもしろい発想だ。

巻末には小栗氏のウェブサイトで実施したアンケート「ダーリンが外国人な人」への回答がいくつか紹介されている。その中から２項目引用する。

「ダーリンがお気に入りの日本語」には「畳マット」「ろくでもない」「あばよ」などというおもしろい回答がある。「ダーリンが疑問に思っていること」として「日本人は電車内で不作法」「日本人は日本語が世界一難しいと思いがち」などが挙げられている。ダーリンだけではない。私も町で毎日嫌な思いをしている。そ

れに，どんな言語だってやさしいはずはない。

最後に本書の真髄とも言えるさおりの言葉を２つ紹介しておきたい。

・違っているところを「イヤだ」と思うか「面白い」と思うか　そういうところで毎日は変わってくるという感じでしょうか（「ふたりのちがい」より）

・考えてみれば私の常識＝世界の常識じゃないわけで……（「家事は大変」より）

この２つの言葉は，なにも外国人の伴侶を持つ人の感想にとどまらない。国際化社会に生きるわれわれが心にとどめておくべき格言である。もっと言えば，外国人とのつきあいにとどまらず，他人とのつきあいにおける金科玉条と言ってもいい。そういえば，１年前にこのコーナーで紹介した Robert Juppé 氏は，常々「国際化は人間化だ」とおっしゃって，ニンゲナイゼーションなどという言葉まで作り出してしまった。さおりの気づいたのと同じことであろう。

さて，拙宅には『ダーリンは外国人』もあったので読んでみたが，こちらの方が印象的であった。ただ，『ダーリン… ２』では外国人ダーリンにも読んでもらえるように漢字にルビがふってあるのが特徴である。

また最近『ダーリンの頭ン中』という，英語と語学をテーマにした本が刊行された。すぐ買って読んでみたが，これまた痛快な本である。次の本が出たら，ぜひまた読もうと思っている。

ダーリンは外国人　2
小栗左多里　著
メディアファクトリー，2004．3
本体価格 950円

最新ニュース英語辞典
デイリー・ヨミウリ　編
東京堂出版，2005．1
本体価格 2,600円

◎『最新ニュース英語辞典』（デイリー・ヨミウリ編，東京堂出版，2005．1）

Non-Japanese のことを理解するのと同じく大切なのが，日本のことを理解してもらうことである。従前から日本を紹介する本はたくさんあったが，最近すばらしい本が出版された。それが本書である。

今年４月に『デイリー・ヨミウリ』が創刊50周年を迎えるのを記念して出版された本書は，現代の日本を英語で発信するための実に便利な辞典である。「政治」「経済」「社会・文化」「国際」「軍事・安全保障」「科学技術・環境」「スポーツ」の７つの分野別に語彙を収録してある。その収録語数が何と9,000語。現代日本を語るには十分な数であろう。最近ライブドアの件で話題になった「株式公開買い付け」も TOB（take-over bid）という訳語に加え，内容に関する説明が載っている。同じ件で取りざたされた「焦土作戦」も scorched earth campaign［strategy］とあり，説明もある。

スポーツの分野は種目別になっているが，特に野球の所を見ると和製英語が多いことに気づく。タッチアップ（tag up），アンダースロー（underhand pitch），ワンポイントリリーフ（spot reliever）など枚挙にいとまがない。裏を返せば，それだけ「日本のもの」になっているということなのだろう。

ときどき付された例文はデイリー・ヨミウリなどからの引用で，いわば生きた例である。また，グラフや図示などの視覚に訴える部分も理解を助けてくれる。

それから，随所にあるコラム記事も読んでいてためになる。「失言」（a slip of the tongue）では前首相の発言にも言及し，「スンニ派とシーア派」（the Sunnis and the Shiites）ではイラクについても説明し，「ハットトリック」（hat trick）では，その語源も紹介してくれる。

至れり尽くせりの本書であるが，発信という目的を考慮すれば，もう少し例があるといい。ページ数の関係で無理だったのだろうが……。とはいえ，会心の１冊であることに変わりはない。４月から総合的な学習の時間で，「英語で紹介する日本のこと」という授業を担当する。大いに利用させてもらいますっ！

（やまもと　りょういち・筑波大学附属高等学校教諭）